

## タスク・トレーニングを導入した基礎看護技術演習「食事の援助」の実践報告

大崎美奈子 大橋洋子 大平富美 熊倉良太 倉島幸子

長岡崇徳大学

Practical Report on Basic Nursing Skills Exercise "Food Assistance" Using Task Training

Minako Osaki, Yoko Ohashi, Fumi Ohdaira, Ryouta Kumakura, Sachiko Kurashima

Nagaoka Sutoku University

要旨：基礎看護学領域では、基礎看護技術演習Ⅱ「食事の援助」においてタスク・トレーニングを取り入れた。2019年度から2021年度にかけてのタスク・トレーニングのシナリオ作成過程を検討することで、基礎看護技術におけるタスク・トレーニングの効果と意義を明らかにすることを目的とした。目標の明確化、事例の簡略化、事前学習の取り組み方、フィードバック内容の具体化、に着目し、シナリオの修正を行った。結果、基礎看護技術教育においてタスク・トレーニングを取り入れることで、学生が学習目標に到達できたか自ら振り返り課題を見つけることができたことから、学生の主体性を引き出すことにつながった。学生が主体的に学び基礎看護技術を修得できるように、さらに検討し改善していくことがシナリオ作成において重要であり、タスク・トレーニングの実践方法について検討しながら改善していくことが教育技法の向上につながると示唆された。

キーワード：シミュレーション教育、タスク・トレーニング、基礎看護技術、食事の援助、シナリオ  
Keywords: simulation education, task training, basic nursing skills, food assistance, scenario

### I. はじめに

近年、教育の分野において学生の主体的な学びが注目されている。従来の基礎看護技術演習では、手順や留意点を学び学生間で実施することが多い。この方法は、基本的な援助方法を学生が学ぶために効率的であると考えられるが、手順を覚えることに留まりやすく、自ら調べたり考えたりすることに課題がある。主体的に学習できる看護師を育成するために、従来型の「知識伝達型教育」から学習者中心の「学習支援型教育」への転換が求められており（阿部、臼井、志賀 他, 2013）、学生が自ら学べるような学習方法の導入が期待されている。看護教育の内容に関する検討会報告書（厚生労働省, 2011）では強化すべき教育内容として、人に寄り添う姿勢、状況を見極め的確に判断する能力、コミュニケーション能力をあげている。それらを学習するための方法として、大学における看護系人

材養成の在り方に関する検討会において、シミュレーション等を活用した演習の導入を推奨している（文部科学省, 2019）。シミュレーション教育とは、実際の臨床場面をリアルに再現した状況で、学習者がその経験を振り返り、ディスカッションを通して専門的な知識・技術・態度の統合を図ることを目指す教育であり、単に学習における方法論を指すのではなく、学習者が自らの頭で考えること、それを表出することにより共有するというプロセスであり、受動的な講義では学ぶことのできない判断力やコミュニケーションスキルを学ぶことができる（阿部、藤野, 2018）と言われている。阿部ら（2018）によるとシミュレーション教育の内容は、1～2年次はタスク・トレーニングによる技術の修得に重点を置き、3～4年次にはシチュエーション・ベースド・トレーニングも含め、アセスメントや状況判断力が必要となる内容とし、段階的に学習できるように構成すると良い

連絡先：〒940-2135 新潟県長岡市深沢町 2278 番地 8  
E-mail: osaki-m@sutoku-u.ac.jp  
TEL: 0258-46-6666 (内 6605) FAX: 0258-86-6637

と述べている。シミュレーション教育においてタスク・トレーニングは主に基礎看護学領域で行われ、技術を原理・原則に従って正確に修得するため、学生が自ら学べるように体系化された学習方法である。

シミュレーション教育に関する研究は、看護基礎教育の中では卒業時の技術修得に関して（谷川，千葉，佐々木 他，2021）や、領域別実習前や統合分野の演習などにおけるのシチュエーション・ベースド・トレーニングの教育効果（阿南，永松，長 他，2015；及川，安藤，遠藤 他，2017；佐藤，石川，石川 他，2020）が多く、1年次の初学者に対しての基礎看護技術演習において導入した結果についての研究はまだ少ない。また、高山ら（2016）は、わが国の看護大学におけるシミュレーション教育は、実践能力の育成につながるシナリオの開発，教育技法の向上，教育効果の評価についての課題があると分析しており発展途中であると言えることから、実践方法について検討していく必要があると考える。

本学のディプロマポリシーでは、「看護実践力」を身につけている人を育成することを目指している。本学の考える看護実践力とは、看護を安全に実施するための知識・技術・態度、成長・発達段階と健康レベルに対処できる知識・技術・態度、エビデンスに基づいた看護を実践する能力、自己の看護実践を振り返り次の援助に生かす能力であり、それらを身につけた人材を育成することを目指している。そして、教育目標のなかの看護を実践するための科学的な根拠に基づいた判断力と問題解決能力を育成するために、基礎看護学領域では、基礎看護技術演習Ⅱ「食事の援助」においてタスク・トレーニングを取り入れた。2019年度から2021年度にかけての基礎看護技術演習Ⅱ「食事の援助」におけるタスク・トレーニングのシナリオ作成過程を検討することで、今後のシミュレーション教育におけるタスク・トレーニングの教育技法

の向上に寄与すると考え報告する。

## Ⅱ. 目的

タスク・トレーニングを導入した基礎看護技術演習Ⅱ「食事の援助」を振り返り、基礎看護技術教育におけるタスク・トレーニングの効果と意義を明らかにする。

## Ⅲ. 演習の概要

### 1. 授業の概要との位置づけ

基礎看護学分野の看護技術に関する科目は、1年次前期の「基礎看護技術演習Ⅰ：2単位60時間」、1年次後期の「基礎看護技術演習Ⅱ：2単位60時間」、2年次後期の「基礎看護技術演習Ⅲ：2単位60時間」で構成されている。本時は、基礎看護技術演習Ⅱの中に位置づけられた演習として「食事の援助」を行った。

基礎看護技術演習Ⅱの到達目標は、(1)健康障害のある人に対する看護基本技術（環境調整・感染予防・体位と移動・食事・排泄・清潔と衣生活）を習得できる、(2)科学的根拠に基づき安全・安楽に看護技術を提供する方法を習得できる、(3)看護技術を身につけるために必要な態度・学習方法を自ら考えて行動できる、(4)実施した看護技術を振り返り、安全性、有効性の視点からよりよい方法を探究することができる、の4点である。

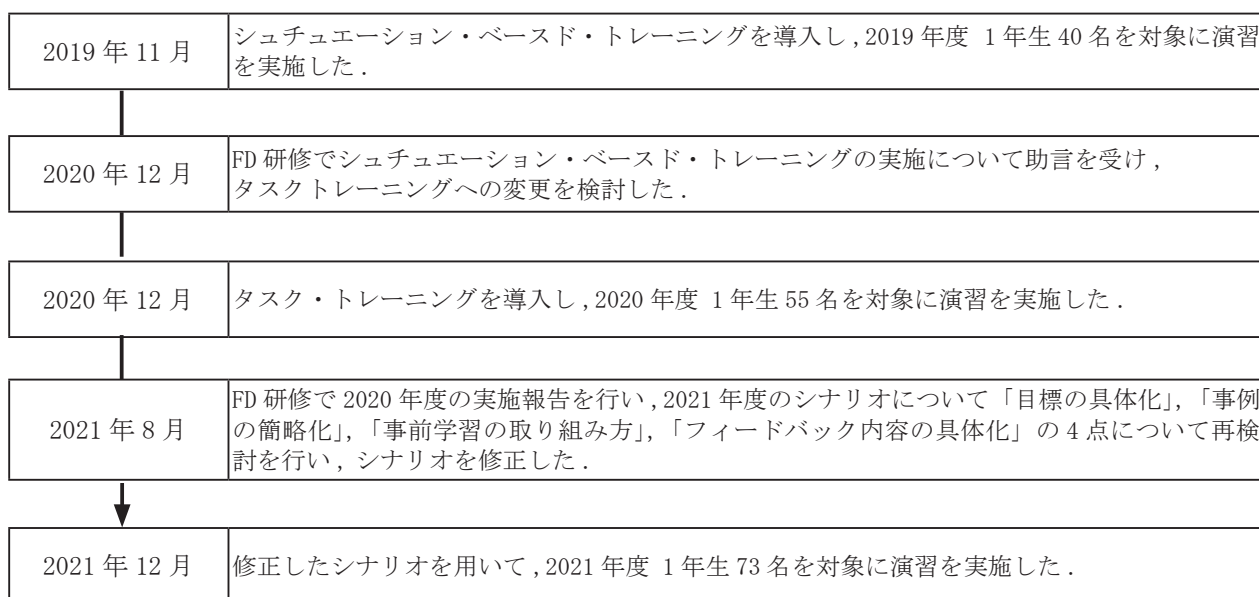
健康障害のある人に対する看護基本技術の中の、食事を促す技術について講義を2コマ180分で行い、人間にとっての食事の意義、食欲に影響を及ぼす因子、食事・栄養摂取状態のアセスメント、食事・栄養に関する援助方法について学習する。講義に関連する看護技術として食事の援助の演習を1コマ90分、口腔ケアの演習を1コマ90分行う。

### 2. 倫理的配慮

授業のシナリオについての評価であり、個人が特定される情報を使用しないことから倫理的配慮は必要ない。

### 3. 演習におけるシミュレーション教育方法の検討プロセス（図1）

図1 演習におけるシュミレーション教育方法の検討プロセス



## 1) 2019年度

「食事の援助」の演習にシチュエーション・ベースド・トレーニングを取り入れ、1年生40名を対象に実施した。4人グループで行い、ブリーフィング5分、実施10分、デブリーフィング10分で行った。目標は、(1) 患者の食べやすさを考えた体位と食事環境を整えることができる、(2) 患者の咀嚼・嚥下状態を観察し、頸部前屈位を維持して介助ができる、(3) 摂取する順番を患者に確認しながら、会話の間を配慮して援助できる、(4) 観察したことを看護師に報告できる、の4点とした。事前学習として提示した事例について学習し、実施後に学習内容を提出することとした。事例は交通事故により受傷し、右橈骨遠位端骨折によるギプス固定中、左手は手関節の打撲と捻挫により固定保護をしており、体全体に打撲の痛みがあるため座位を保持することは難しく、今後の不安から食欲が低下し食事摂取量が半分程度に減少してしまった患者に対して栄養補給の目的で間食(ゼリーなど)を摂取するため食事介助を実施し、看護師に報告するという内容とした。事例の設定で実施を行い、どのように看護を行うかグループで考えてから実施できるようにした。

デブリーフィングガイドは(1) 患者の食べやすさを考慮し、実施したことを挙げてください、(2) 飲み込みやすさについてどのようなことを意識して援助したか挙げてください、(3) 患者の安全についてどのようなことを意識して援助しましたか、(4) どのようなことを観察できましたか、(5) 報告は、正確にできましたか、(6) そのほかに、気を付けたことや配慮したことを挙げてください、と設定した。結果は、教員のデモンストレーションを見学してから学生が実施する今までの演習とは方法が違うため、戸惑う様子が見られた。しかし、緊張しながらも、事前にグループで相談した内容を基に看護師役の学生が痛みに配慮しながら体位を整えたり、一口量やスピードを考慮して援助を行っていた。けれども、挨拶や患者との会話に意識が向いてしまい時間内に食事の援助を行うことが難しく、目標は達成できないものもあった。演習後のミニッツペーパーによる学生の感想では、「勉強になって良かった」「改善点が見つかった」「臨機応変や、実践力が身につく」「周囲と協力して実施できた」「看護の現場を想像できた」という意見が聞かれた。一方で、「緊張した」「難しかった」「先生の見本を見たほう

が頭に入る」「正解が分からない」という意見も聞かれた。

## 2)2020 年度

FD 研修でシミュレーション教育の講演があり、作成したシナリオについて検討を行い、講師より1年次の基礎看護技術演習においてシチュエーション・ベースド・トレーニングは内容が高度であり難しいのではないかという助言を受けた。「シナリオ」とは、効果的なシミュレーション学習をねらって教員が作成する体系化された計画(阿部,藤野,2018)であり、学習目標、事例、フィードバック内容など授業に必要なすべてを含む授業計画のことである。講師の助言により1年次の基礎看護技術演習は、タスク・トレーニングによって学生が原則を理解し実施できるようになることが重要であることを確認し、1年生55名を対象に食事の援助の演習にタスク・トレーニングを実践した。

学生への説明を講義の中で行い、学習目標、方法、についてPowerPointと説明用紙を用いて具体的に説明した。学習目標は、(1)患者の食べやすさを考えた体位を整えることができる、(2)安全に食事摂取できるように、頸部前屈位を維持して介助ができる、(3)患者の咀嚼・嚥下状態を観察し、食べる順番を配慮して援助できる、の3点とした。事例は、3日前に交通事故により受傷し、骨折と捻挫により両手不能使用できない状態の患者に対しての食事の援助を考えてくるという内容であった。事前学習は演習に持参し実施後に演習記録と一緒に提出させた。フィードバックの内容は(1)食事の内容が正しいものであることを確認できる、(2)食事にアレルゲンとなる食物が含まれていないことを確認できる、(3)必要物品の準備ができる、(4)患者への説明を行い、同意を得ることができる、(5)患者が食物を食べやすいように体位を整え配膳することができる、(6)食事の前に口腔内の状態を観察し食事に適した状態か確認できる、(7)患者の頸部が前屈位になるように食事の介助ができる、

(8)患者の飲み込みを確認しながら食事を介助できる、(9)患者の好みやバランスを確認しながら介助ができる、(10)食事を介助されることに対して不快な気持ちにならないように介助ができる、(11)患者の栄養摂取状況を観察することができる、(12)下膳し、安楽な体位を整えることができるとし、演習記録で振り返ることができるようにした(図2)。

結果、学生は演習に集中しており、体位の調整や介助のスピードについて、頸部前屈位の保持やゆっくり介助することを意識して実施できた。しかし、事前学習の内容を確認しなかったため、頸部前屈位を保持するスプーンの介助方法や看護師の立ち位置についての知識が不十分な学生がいた。また、学習目標が具体的でなかったため、患者の確認やアレルギーの確認を行うことができず適切な食事内容であるか、確認することができない学生もいた。加えて、フィードバックの内容と演習記録を連動させたが、視点が明確でなかったため、なぜできなかったのか、どのように援助すればよいか、まで深く考えることは十分できなかった。

## 3)2021 年度

タスク・トレーニングのシナリオを作成し、FD研修講演で再度講師の助言を受けた。目標を追加し具体化を図り、事例を両手が使用できない状態と簡略化し、事前学習を演習前に提出させ、フィードバック内容を具体的に追加し修正を行った。(表1)

## IV. 演習の実際

### 1. 修正後のシナリオによる2021年度の演習

1年生73名を対象に演習を行った(図3)。

学生への説明を講義の中で行い、学習目標、方法、物品についてPowerPointと説明用紙を用いて具体的に説明した。事前学習は、学生が確実に先行知識をもって演習に参加できるように演習前に提出させた。そのほかに、演習時のブリーフィングにおいても学習目標、方法、物品の説明を詳細に行った。また、「記録用紙の項目に沿ってフィードバックを受けた結果から



図2 2020年度演習記録

基礎看護学実習Ⅱ 第25・26回 食事介助演習 チェックリスト・演習記録

		学籍番号	氏名		
		確認事項・結果	評価	考察	
確認	1	食事が患者本人のものであり内容が正しいものであることを確認できる。			
	2	食事にアレルゲンとなる食物が含まれていないことを確認できる。			
準備	3	必要物品の準備ができる。(吸い飲み, コップ, フェイスタオル, おしぼり, ストロー, 台布巾)			
	4	患者への説明を行い, 同意を得ることができる。			
	5	患者が食物を食べやすいように体位を整え配膳することができる。(0度, 45度, 90度)			
	6	食事の前に口腔内の状態を観察し食事に適した状態か確認できる。			
実施	7	患者の頸部が前屈位になるように食事の介助ができる。			
	8	患者の飲み込みを確認しながら食事を介助できる。			
	9	患者の好みやバランスを確認しながら介助ができる。			
	10	食事を美味しく食べられるように解除することができる。			
片付け	11	食事摂取量を観察することができる。			
	12	下膳し, 安楽な体位を整えることができる。			

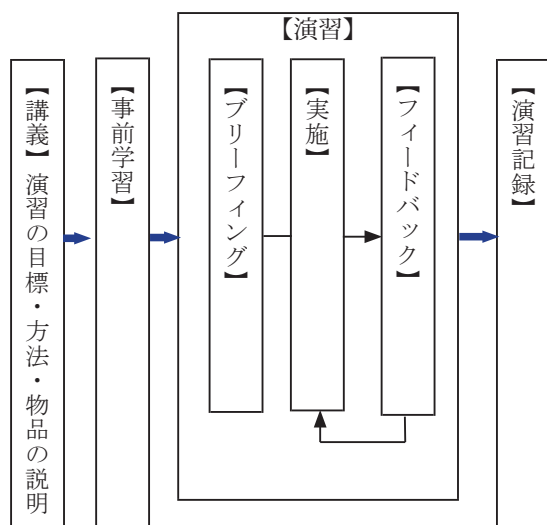
患者役を行って気づいたこと

評価：○できた △大体できた ×できなかった

表1 シナリオの修正

	2020 年度シナリオ	2021 年度シナリオ
	患者がおいしく安全に食べられる食事の援助	患者がおいしく安全に食べられる食事の援助
対象、時間	1 年次後期, 56 名, 2 コマ 180 分, 3 人一組で実施	1 年次後期, 73 名 AB クラスに分け実施, 1 コマ 90 分, 2 人一組で実施
演習目標	(1) 患者の食べやすさを考えた体位を整えることができる。 (2) 安全に食事摂取できるように, 頸部前屈位を維持して介助ができる。 (3) 患者の咀嚼・嚥下状態を観察し, 食べる順番を配慮して援助できる。	(1) 患者が安全に食事を摂取できるように, 適切な食事内容か確認することができる。 (2) 患者の食べやすさを考えた体位を整えることができる。 (3) 安全に食事摂取できるように, 頸部前屈位を維持して介助ができる。 (4) 患者の咀嚼・嚥下状態を観察し, 食べる順番を配慮して援助できる。
事例	長岡崇子様 19 歳 大学 1 年生 3 日前に交通事故により受傷し, 骨折と捻挫により両手が使用できない状態。 今後の不安から食欲が低下し, 食事摂取量が半分程度に減少してしまった。 普通食が提供されており, 栄養補給の目的で間食のフルーツゼリーとお茶を摂取する。	長岡崇子様 両手が使用できない状態。 食欲が低下し, 食事摂取量が半分程度に減少してしまった。 普通食が提供されており, 栄養補給の目的で間食のフルーツゼリーとお茶を摂取する。
内容	事例の患者に対しての食事介助 (1) 食事内容の確認 (2) 準備 (3) 食事介助 ①ベッドの角度による違い (0 度, 45 度, 90 度) ②スプーンの大きさや一口量による違い ③食形態の違い (固形・とろみ・液体) (4) 下膳	事例の患者に対しての食事介助 (1) 食事内容の確認 (2) 準備 (3) 食事介助 ①ベッドの角度による違い (0 度, 45 度, 90 度) ②スプーンの大きさや一口量による違い ③食形態の違い (固形・とろみ・液体) (4) 下膳
事前学習	* 演習終了後に提出 (1) 嚥下に関連する部位とメカニズムを図で書き説明する。 (2) 演習事例について適切な援助を考える。 ①食事の姿勢・体位はどのように行いますか。 ②どのようにして食事を介助しますか。 ③食事介助の留意点について記載する。 ④どのようなことを観察しますか。 ⑤食欲のない患者に対してどのような言葉をかけ対応しますか。	* 演習前に提出する。演習時に学生に返却し, 追加学習を行い演習後に演習記録用紙と一緒に再度提出する。 (1) 嚥下に関連する部位とメカニズムを図で書き説明する。 (2) 演習事例について適切な援助を考える。 ①食事の姿勢・体位はどのように行いますか。 ②どのようにして食事を介助しますか。 ③食事介助の留意点について記載する。 ④どのようなことを観察しますか。 ⑤食欲のない患者に対してどのような言葉をかけ対応しますか。
フィードバック内容	(1) 食事の内容が正しいものであることを確認できる。 (2) 食事にアレルギーとなる食物が含まれていないことを確認できる。 (3) 必要物品の準備ができる。 (4) 患者への説明を行い, 同意を得ることができる。 (5) 患者が食物を食べやすいように体位を整え配膳することができる。 (6) 食事の前に口腔内の状態を観察し食事に適した状態か確認できる。 (7) 患者の頸部が前屈位になるように食事の介助ができる。 (8) 患者の飲み込みを確認しながら食事を介助できる。 (9) 患者の好みやバランスを確認しながら介助ができる。 (10) 食事を介助されることに対して不快な気持ちにならないように介助ができる。 (11) 患者の栄養摂取状況を観察することができる。 (12) 下膳し, 安楽な体位を整えることができる。	(1) 食札と患者氏名を確認し食事の内容が正しいものであることを確認できる。 (2) アレルギーがないか食札と内容を確認し, 本人にも確認できる。 (3) ベッドアップを 30 ~ 60 度し, 膝を曲げて安楽な体位をとることができる。 (4) 食事の前に口腔内の状態を観察し食事に適した状態か確認できる。 (5) 患者の頸部が前屈位になるように介助ができる。 (6) スプーンを患者の口に入れ, 口唇を閉じたら, 顎を上げない程度に自然にスプーンを引き抜くことができる。 (7) 適量を口に運び, 患者が飲み込んだことを確認してから次の食物を口に入れることができる。 (8) 患者に確認しながら, 水分と固形物を交互に摂取させることができる。 (9) 患者の表情, 反応, 食事量, 口腔内の状況, むせの有無を確認しながら介助ができる。 (10) 最後に口元を拭いて清潔にし, ねぎらいの言葉をかけ, 片付けができる。 (11) 下膳し, 安楽な体位に整えることができる。

図3 2021年度演習プロセス



自分の援助を振り返り、より良い援助について考察します」と説明した。

学習目標は、学生が何を学ぶ必要があるのか分かるように表現した。準備されている食事が患者の食事で間違えがないか確実に確認できるように（１）患者が安全に食事を摂取できるように、適切な食事内容か確認することができるを追加した。また、どのようなベッドの角度でも患者が安全に安楽に食事摂取できるような姿勢を整えられるように（２）患者の食べやすさを考えた体位を整えることができる、（３）安全に食事摂取できるように、頸部前屈位を維持して介助ができるとした。さらに、咀嚼・嚥下状態の観察ができ、患者の好みを考慮した援助を行えるように（４）患者の咀嚼・嚥下状態を観察し、食べる順番を配慮して援助できるとした。事例については、両手を使用できない状態とし、食事の援助の原則である頸部の角度や、一口量、スピード、嚥下の観察などに集中して実施できるようにした。そして、フィードバックの内容を「食札と患者氏名を確認し食事の内容が正しいものであることを確認できる」、「アレルギーがないか食札と内容を確認し、本人にも確認できる」、「患者の頸部が前屈位になるように介助ができる」、「スプーンを患者の口に入れ、口唇を閉じたら顎を上げない程度に自然に

スプーンを引き抜くことができる」などとし、目標を達成するために学生に期待する成果を明確に表現した。加えて、フィードバック内容と演習記録を連動し、自分の技術について振り返り改善点を考えられるようにした（図4）。

## 2. 学生の反応

学生は、食事時の姿勢の保持、誤嚥を予防する頸部の角度などについて理解しており、事前学習で行った解剖や嚥下についての知識を活用して演習を行うことができていた。また、落ち着いてスムーズに演習に取り組んでいた。患者が安全に正しい食事を摂取できるように、患者に氏名を答えてもらい食札と照合する確認ができており、アレルギーの有無についても確認することができていた。頸部前屈位を考慮した姿勢の保持について、どのようなベッドの角度においても安全に摂取できるように枕のあて方を工夫し、実践していた。食事の介助方法についても看護師の立ち位置に配慮し、頸部前屈位の保持を意識したスプーンの角度や一口量、スピードなどの安全な介助方法を意識しながら演習を行うことができた。フィードバックを受けて演習記録で考察した内容として、「ベッドの高さと看護師の立ち位置は、同じ高さだと頸部前屈位が保てない、差をつけすぎると介助が行いにくいなどを考えると10 cm程度看護師の方が低いと良い」、「ベッドの角度が0度の場合は吸い飲みが適しているし、90度の場合はコップもしくはストローが適しており、角度に応じて変更する必要がある」、「ベッドの角度が90度状態で枕を使用すると首が安定しないためバスタオルを半分にして首にあてると安定し頸部前屈位を保持できた」、「ベッドの角度が0度の場合は、真上を向いていると食物が咽頭に一気に落ちやすいので、枕を使用して横向きにすると食べやすい。解剖学的構造を考慮すると左側臥位が良いのではないか」など自ら改善点や工夫点を考えた記述ができていた学生が多かった。

図4 2021年度演習記録

基礎看護学実習Ⅱ 食事介助の技術演習 演習記録

学籍番号

氏名

担当教員

確認事項・結果		評価	考察
確認	1 食札と患者氏名を確認し食事の内容が正しいものであることを確認できた。 〈結果〉		
	2 アレルギーがないか食札と内容を確認し、本人にも確認できた。 〈結果〉		
準備	3 ベッドアップを30～60度し、膝を曲げて安楽な体位をとることができた。 〈結果〉		
	4 食事の前に口腔内の状態を観察し食事に適した状態か確認できた。 〈結果〉		
実施	5 患者の頸部が前屈位になるように介助ができた。 〈結果〉		
	6 スプーンを患者の口に入れ、口唇を閉じたら、顎を上げない程度に自然にスプーンを引き抜くことができた。 〈結果〉		
	7 適量を口に運び、患者が飲み込んだことを確認してから次の食物を口に入れることができた。 〈結果〉		
	8 患者に確認しながら、水分と固形物を交互に摂取させることができた。 〈結果〉		
	9 患者の表情、反応、食事量、口腔内の状況、むせの有無を確認しながら介助ができた。 〈結果〉		
片付け	10 最後に口元を拭いて清潔にし、ねぎらいの言葉をかけ、片付けることができた。 〈結果〉		
	11 下膳し、安楽な体位に整えることができた。 〈結果〉		
患者役を行って気づいたこと			
演習の感想			

評価：○できた △大体できた ×できなかった



## V. 考察

看護基礎教育では臨床判断に必要な基礎能力を養うための演習やシミュレーションの強化が求められており、学生が自ら学べるようにすることが重要である。特に、1年次のシミュレーション教育は、「自ら課題を見つけ解決する」ということに心身共に順応していかなければならない段階であると言われており（阿部，藤野，2018）学生が原理・原則を理解し，自ら調べたり考えたりしながら主体的に学習できるようになることを目指している。

今回のシナリオの改善では学習目標を，学生が何を学ぶ必要があるのか分かるように具体的に表現した。織井（2017）は，シミュレーション学習を行う場合には，単純で具体的な目標の方が，よりよいシミュレーション実践に導くことができると述べている。そのほかにも，学習目標は学習者にとって興味が持て「達成できそう」と感じ，自信が持てるものか要素を盛り込みすぎていないかを検討する必要があると言われており（阿部，臼井，志賀 他，2013）。目標を具体的に提示することで，何が重要なのか，事前に何を学習する必要があるのか分かり，学生の興味・関心を引き出すことができ事前学習に取り組みやすくなったと考えられる。また，期待される成果が明確になっていれば，考慮してほしい論点をすべて検討できていたかどうか明らかになるため（小林，鈴木，2018），目標が明確であれば実施した援助を振り返るときの視点となり技術の修得状況を学生自ら評価することにつながったと考えられる。学習目標の「患者が安全に食事を摂取できるように，適切な食事内容か確認することができる」は，用意された食事が本当に患者のもので正しいのか確認するための方法や，危険はどのようなことが考えられるのかについて自ら調べることにつながった。「患者の食べやすさを考えた体位を整えることができる」「安全に食事摂取できるように，頸部前屈位を維持して介助ができる」の目標は，解剖や嚥下の知識からどのくらいの角度が食べ

やすいのか，姿勢を保持するにはどのように枕を活用すると良いのか考え，調べるきっかけとなった。「患者の咀嚼・嚥下状態を観察し，食べる順番を配慮して援助できる」の目標は，咀嚼や嚥下状態を観察する項目や方法について調べることができ患者の好みも考慮して援助する必要性に気づくことになったと考える。下川原ら（2019）は1年次のシミュレーション教育で学生があげた課題に知識の不足感がありシミュレーションの準備を十分に行う必要があると述べている。看護技術演習のように，知識の活用を目的とした学習課題の場合，知識を習得していなければ表面的な学習になる（小林，鈴木，2018）ため，事前学習を具体的に提示し演習前に確認することで，学生は必要な学習を行ってから演習に臨むことができる。確実に知識を身につけて演習に臨むことで，学習目標に到達し学びを深めることができたと考えられる。小林ら（2018）は「面白そう，役に立つ」など学生の知的好奇心を刺激したり，実用的な価値を学生が実感できるような学習課題を準備しておきましょうと述べている。したがって，シミュレーション演習で実施する内容について学習目標を具体的に提示し，調べ学習を行うことで事前学習が演習に役に立つことを実感できたのではないかと考える。

効果的な学習を実現するためには，実際に起こった状況を，学習者のレディネスや到達させたい学習目標に照らし合わせて検討し，そのうえで，教材としての状況に作り替える必要があると言われており（阿部，臼井，志賀 他，2013）。1年次の基礎看護技術演習は，学習目標を修得するために考えやすい教材を検討する必要がある。しかしながら，2020年度の事例は，交通事故や骨折，捻挫など食事の援助以外に調べたり，考慮する内容が多かった。そのため，事例を「両手が使用できない状態」と簡略化することで，安全に嚥下しやすい頸部の角度や姿勢などの原則を考え，手技に集中できたのではないかと考える。さらに，シミュレーションによる経験

を振り返ることで知識と技術が統合される（阿部，2018）ため、実施後のフィードバックが重要である。何を振り返るのか意識的に「選択する」という段階を踏むことが必要であり経験を価値化する必要がある（鈴木，2016）ため、フィードバックの視点を具体的な内容に変更した。食札と患者氏名を確認し食事の内容が正しいものであるか、アレルギーがないかを確認し、実際にできたのかフィードバックを受けることで、患者が安全に食事摂取できるように適切な食事内容か確認することができたのか振り返ることができた。また、ベッドアップを30～60度し、膝を曲げて安楽な体位を取ることができていたか、フィードバックを受けることで患者の食べやすさを考えた安楽な体位を取ることができていたか振り返ることができた。加えて、患者の頸部が前屈位になるように介助ができていたのか、患者が顎を上げない程度にスプーンを口から引き抜くことができていたのかフィードバックを受けることで、安全に食事摂取できるように頸部前屈位を維持して介助ができていたか振り返ることができた。さらに、適量を口に運ぶことができたのか、患者の好みを確認していたか、表情、反応やむせの有無を確認しながら介助できていたかについてフィードバックを受けることで、患者の咀嚼・嚥下状態を観察し、食べる順番を配慮した援助ができていたのか振り返ることができた。何について振り返る必要があるのか視点が明確になることで目標が達成できていたのか考えることができるため、学習目標やフィードバックの視点を明確にすることで目標に到達できたのか自ら振り返ることができたのではないかと考える。さらに、フィードバック内容と連動した演習記録を用いて振り返ることで、自ら改善点を考えることにつながったのではないと思われる。その一方で、学生と教員、教員同士がシナリオを共有することができるとフィードバックでおさえる内容が統一され、学生が同じレベルに到達できる指導

になるのではないかと考える。しかしながら、事前学習の内容が不十分のまま演習に臨む学生や、演習記録の中に改善点や工夫点を考えた記述ができていない学生もいたことから学習状況の確認方法については検討が必要であると考え

る。これらのことから、1年次の基礎看護技術教育では自ら考え実践し、その経験から学生自ら課題を見つけ解決できるような学習方略が重要であり、そのための方法としてタスク・トレーニングは効果的であると考えられる。すなわち、学生が自ら学習し、自己の課題を見出すプロセスを支援できるようなシナリオの作成が反復練習につながり、タスク・トレーニングの目的である多様な条件下でも安全・正確に実施できるまでの技術修得につながるのではないかと考える。シミュレーション教育におけるシナリオとは「効果的なシミュレーション学習をねらって指導者が設計する、体系化された計画」を意味する（阿部，臼井，志賀 他，2013）。したがって、学生が主体的に学び基礎看護技術を修得できるように、さらに検討し改善していくことがシナリオ作成において重要であり、タスク・トレーニングの実践方法について検討しながら改善していくことが教育技法の向上につながると示唆された。

## VII. 今後の課題

基礎看護学領域では食事の援助以外の演習もタスク・トレーニングを取り入れて行い、内容を充実させることで学生が自ら学び基礎看護技術を修得できるようにしていく必要がある。今回の実践におけるタスク・トレーニングの評価は教員の主観によるものであるため、客観的で明確な評価方法を検討していく必要がある。今後は、改善したシナリオでタスク・トレーニングを実施した結果から各プロセスについて評価し、目的が達成できたか、成果が得られたか学生からの評価を踏まえて検討していくことが課題である。

## VIII. 結論

1. 基礎看護技術教育においてタスク・トレーニングを取り入れることで、学習目標に到達できたか自ら振り返り課題を見つけることができたことから、学生の主体性を引き出すことにつながった。

2. タスク・トレーニングの実践方法について検討しながら改善していくことが教育技法の向上につながる。

### <著者資格>

大崎美奈子；研究責任者，研究統括，データ収集，分析，論文執筆

大橋 洋子；データ収集，分析，論文執筆

大平 富美；データ収集，分析，論文執筆

熊倉 良太；データ収集，分析，論文執筆

倉島 幸子；データ収集，分析，論文執筆

### 付記

本研究は内容の一部を日本看護シミュレーションラーニング学会第3回学術集会において発表した。本研究において利益相反は存在しない。

### 引用文献

阿部幸恵，藤野ユリ子 (2018). 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入，日本看護協会出版会。

阿部幸恵，臼井いづみ，志賀隆，高橋聖子，別生伸太郎 (2013). 看護のためのシミュレーション教育，医学書院。

阿南あゆみ，永松有紀，長聡子，佐藤亜紀，松岡智恵子，豊福佳代，他 (2015). 産業医科大学産業保健学部看護学科の総合技術演習Ⅰの展開—シミュレーション教育の導入—。産業医科大学雑誌，37 (4) 305－312

厚生労働省 (入手日：2020年1月20日)。看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。 [https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei\\_127329.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_127329.html)

小林忠資，鈴木玲子 (2018). アクティブラーニングの活用。医学書院。

下川原久子，小沢久美子，久保宣子，蛭田由美 (2019). 看護基礎教育1年次におけるシミュレーション教育プログラムの学習効果—自己評価および振り返りレポート分析の結果から—。産業文化研究 28, 29－40

及川紳代，安藤里恵，遠藤良仁，三浦奈都子，平沢貞子，小澤尚子 (2017). 成人看護学領域における術後看護のシミュレーション演習の課題の検討。岩手県立大学看護学部紀要，19, 17－32

織井優貴子 (2016). 看護シミュレーション教育基本テキスト 設計・実践・評価のプロセス，東京都，日総研。

文部科学省 (入手日：2019年1月20日)。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 (第1回)。 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/1417961.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/1417961.htm)

佐藤由理子，石川智子，石川徳子，棚橋泰之，中村仁志，飯塚雅子，他 (2020). 「看護技術の統合」におけるシミュレーション教育導入への取り組み。神奈川歯科大学短期大学部紀要，7, 29－37

鈴木敏恵 (2016). アクティブラーニングをこえた看護教育を実現する。医学書院。

高山詩織，山田恵子，滝恵津，白鳥孝子，高木初子，水戸美津子 (2016). わが国の看護大学における状況設定シミュレーションの現状と課題。聖徳大学研究紀要 (49), 89-94

谷川涼子，千葉武揚，佐々木知映，伊藤耕嗣，木村ゆかり，小池祥太郎，他 (2021). 卒業前シミュレーション教育の有用性—卒業生からの評価—。日本ヒューマンケア科学会誌，14 (2), 92－98